



虹をかけよう『にしむた』

令和6年12月24日 NO.55

筑後市立西牟田小学校 校長 徳永 裕(文責)

いつもは、この紙面の冒頭には大きく写真を載せていました。しかし今回は、**冬休みに向けて大切にしていたきたいこと**を書きます。文字ばかりで読みにくいと思いますが、ご了承ください。まずは結論から先に述べます。

- 冬休みには、たくさん本を読みましょう。
- スマホ・タブレットを使う時間を短くしましょう。(1時間未満を目指す)
- 睡眠時間を確保しましょう。(起床時刻がずれないように。早寝・早起き)

私は西牟田小学校に赴任する少し前から“「わかったつもり」から「わかった」へ”という言葉を使うようになりました。コロナウイルス感染症の拡大により、GIGA スクール構想の実施が前倒しされ、一人に一台端末が渡されるようになった時期と重なります。

電子黒板・タブレットなどのICT機器が普及すると、授業では写真や動画を効果的に用いられるようになりました。子ども達は、学習内容をわかりやすく捉えることができました。

しかし、授業を見ていて、これでいいのだろうか?と疑問が生じました。

子ども達のノートを見ると、途中の考えが殆ど書かれていないのです。

写真や動画・タブレットを使った操作等は、とてもわかりやすく、見ただけでわかります。あまりにもわかりやすいために、子どもの意識として「見てわかった」で完結しているかもしれません。

そこで、昨年度から捉えた内容を**主に書いて再現する「再現するアウトプット」**を重視してきました。

それともう一つ。危惧していたことが、生活のリズム(生活習慣)がもたらす学習(習慣)への影響です。今年度は、「習慣づくり」と「アウトプットを重視した対話活動の在り方」に着目した学習活動を中心に取り組みました。

改めて、スマホ等と睡眠時間や学習との関係を見ていく必要があると考えました。ここでは、私が2学期に読んだ本から引用して紹介していきます。(本来ならばグラフを載せたかったのですが、著作権に関わるかもしれませんので、文章の引用だけにします。調査対象：平成30年度仙台市小5～中3 36,603名)

「本を読むだけで脳は若返る」(川島隆太著PHP新書)より引用

- 驚くのは、端末の使用が1時間未満の子どもたちは、全く勉強しない群でも偏差値50、つまり平均点に届いていることです。その一方で、スマホ・タブレットを1時間以上使う子どもたちが平均点に到達するのは、家庭学習を「1～2時間」している群から上です。「2～3時間」の群を見ても、スマートフォンの使用時間が短い子どもたちはかなり良い点が取れているのに、1時間以上使っている子どもたちはほぼ平均点しか取れていません。家庭で2時間も3時間も勉強するのはとても大変だと思いますし、かなりまじめな子どもたちだと思われそうですが、学習効果がうまく出ていないのです。(P125より)

【裏面に続きます】

- 結論から言うと、スマホ・タブレットを長時間使う習慣をもち続けた子どもたちは、学力が低い状態を維持していました。そして、スマホ・タブレットを「1時間未満」で抑えることができていた多くの子どもたちは、学力が高い状態を維持していました。さらに、途中でスマホ・タブレットをあまり使っていなかった状態からヘビーに使い始めた子どもたちは、その翌年から極端に学力が下がっていたことも確認できました。

逆に、スマホ・タブレットをヘビーに使っていたけれど、生活習慣を少し改めて利用時間が短くなった子どもたちは、翌年から学力が上がり出すという傾向が観察できました。(p130より引用調査対象：仙台市公立小中学校に通う7万人以上の児童生徒)

- 実は、映像は、楽に情報を受け取ることができる代わりに、想像の多様性が失われる面があるのです。小説は、能動的に情報を求めていかないとアクセスできないので、面倒ではあるのですが、想像の多様性が担保されていて、そこから様々なイメージや思索を広げることができます。私は、言葉で伝えるという行為は、文化の多様性にもつながっているのではないかとも思っています。(p180より引用)

「スマホより読書」(藤原正彦著PHP文庫)より引用

- (読書時間が減っている原因は何でしょう?)

いうまでもなくスマホです。たとえば2011年の統計を見ると、中学生のスマホ保有率は約3%、高校生は7%でした。ところがわずか3年後、2014年になると中学生が42%、高校生は91%に跳ね上がります。さらに、2019年になると、中学生が90%高校生が96%。今回、問題にしている中学生に関していえば3%から42%、90%へとまさに激増です。

おまけにスマホの使用時間を調べると、中学生で平均1日2時間。平均ですから当然、3時間、4時間、5時間を費やしている生徒もいる。その間、奪われているのが「本を読む時間」です。

スマホの最大の罪はまさにこの1点、「読書の時間を奪っていること」に尽きます。あるいは、「孤独になる時間」を奪っている、といってもよい。

人間の深い情緒は、孤独な時間から生まれます。暇や寂しさを紛らわせるため、スマホゲームに没頭し、LINEやメールのやりとりでせつかくの孤独な時間を台無しにされてしまう。人間にとって最も大事な読書の時間を、スマホという名の麻薬が強奪しているのです。(p48より引用)

- 国民はインターネットやスマホで知識が得られて便利と思っているようですが、インターネットやスマホを1日中、見たところで得られるのはせいぜい「情報」止まり。情報もビジネスに必要ですが、大した「知識」にはなりません。情報というのは「知識」や「教養」まで高めなければ使い物にはならないのであって、三者のあいだには隔絶した違いがある。情報を知識、教養までに高めるには、結局のところ本を読むしかない。

・・・情報というのは、それぞれが孤立しています。孤立した情報が組織化されて、初めて知識になる。「情報がつながること」が知識であり、さらに「知識がつながること」が教養。この段階を歩むことが、教養を高めることの意味です。われわれは本を読んだあと、物語や記述の内容に思いを巡らせたのち、今度は身の周りの現実には当てはめて再び考える。この読書時の脳の働きが、人間の教養を育むわけです。インターネットでは得られない経験です。(p59より引用)

- 紙の本とは異なり、デジタル本は「見えなくなる」から、読んだことすら忘れてしまう。この点、紙の本とは決定的な差があるわけです。脳科学者による小学生を対象とした実験によると、記憶の定着率において紙の本のほうがはるかに上ということです。(p111より引用)